

「赤ちゃんポスト」のその後の報道や番組に接して

「赤ちゃんポスト」の2008年度の運用状況が公表、報道され、昨年度は25人が預けられ、開設から2年間の総人数は42人とか。

病院が予想した「利用は年に1、2人程度」を大きく上回り、運用の理念である「1人で悩み、育てられない親から預かる」ケース以外も少なくないようで、身元の分かった親の居住地は全て県外だったとか。

「赤ちゃんポスト」については、以前に当HPでも触れたこと（HP「雑学BN」のマスコミ等コメント関係（Ⅲ）、2007.03.22. 「『赤ちゃんポスト』設置問題を、どうお考えですか？」：参照）があるが、先日、TV番組「アレ 今 どうなった？ 『赤ちゃんポスト』」でも取り上げられていたので見た。

病院は「赤ちゃんポスト」の扉にもまず相談を呼びかける掲示を行い、24時間体制の電話相談等の窓口も設けたようであり、相談等で救われた赤ちゃんは3倍にのぼるとかで、番組では、そうした電話相談のいくつかのケースも紹介されていた。その一つに、臨月まで妊婦検診を一度も受けていない女性のケースも。

預けられた赤ちゃんは、まず病院で健康状態確認と共に警察に通報され、警察は犯罪性（保護責任者遺棄罪、児童虐待防止法、等）がないかを調べ、特に問題がなければ、赤ちゃんは約一週間後には病院から乳児院へ。

赤ちゃんポストの本来の目的は、諸事情のために育てることのできない新生児を親が匿名で養子に出すためのシステムかなと思うが、病院の予想以上の預けられる赤ちゃん数を知ると、また、新生児や乳児だけでなく幼児も預けられたことを知ると、設置当時から云われている「捨て子」を容認するののかとの意見にも頷けなくもない。

かといって、生後間もない赤ちゃんの遺棄、殺害、虐待の報道に接すると、乳・幼児の命は「早急かつ安全に保護されてしかるべき」という人道論の具体的方策の一つとしての「赤ちゃんポスト」も必要なかなとも思う。

この道徳と人道の双方の観点からの議論は永遠に続く課題かなと思うが、「相談呼びかけで救われた赤ちゃんは3倍にのぼる。」との情報に接すると、同病院の関係者が云っているように「まだまだ『悩めるお母さん』が社会に多く存在し、いつでも相談できる機関設置が急務」が、「赤ちゃんポスト」是非論より早急な課題のように思えた。